非文法的な英語受動文の容認・解釈における二種類の母語の影響
—日本語の間接受動文と使役受動文からの影響—*

竹　田　実　夢・穂　苅　友　洋

キーワード

第二言語習得・母語の影響・間接受動文・使役受動文・日本語を母語とする英語学習者

要旨

Izumi and Lakshmanan（1998）以来、日本語を母語とする英語学習者は、一見すると日本語の間接受動文（例：「私は息子に泣かれた」）に相当する英語受動文（例：**I was cried by my son*）を産出・容認することが数々の研究で報告されている。しかし、この誤りに関するこれまでの研究（例：穂苅, 2016；Inagaki et al., 2009）では、この誤りが間接受動文以外の学習者母語の性質によっても生じうることは想定されてこなかった。本稿では、日本語母語話者に対する実験から、この誤りが日本語の間接受動文の影響だけでなく、日本語の使役受動文（例：「私は息子に泣かされた」）の影響も受けていること、母語の影響の現れ方は動詞の種類（自動詞・他動詞の区別）によっても異なることを実証的に明らかにする。そのうえで、第二言語習得研究一般への示唆として、表面上同じ誤りであってもその原因は複数存在しうる（若林ほか, 2018）こと、学習者母語の影響の出現・消失は、さまざまな要因に左右されうることを論じる。

1．はじめに

わたしたちが母語を獲得する場合と、第二言語・外国語（以下、両方を含めて L2 と呼ぶ）を習得する際の大きな違いのひとつは、すでに獲得した言語がある状態で習得が始まるか否かである。そのため、L2 の理解や使用においては、さまざまな面で学習者の母語による影響が「誤り（Error）」というかたちで現れる（Towell & Hawkins, 1994）。この誤りの原因を特定することは、学習者の言語知識がどのような状態にあるか、母語話者の

---

*　本稿は第 21 回日本第二言語習得学会国際年次大会（J-SLA2021：2021 年 10 月 23–24 日）の学生ワークショップにおける発表をもとに作成した第一著者の卒業論文（竹田, 2021）の実験の一部に焦点を当て、データの追加収集・再分析を行い、理論的考察を加え、論考を大幅に加筆修正した論文である。

言語知識と何がどのような点で異なるのかを知る手がかりとなるため（穂苅, 2021）、Corder（1967）以来、膨大な数の研究が積み重ねられてきた。しかしながら、具体的に学習者母語のどのような性質がL2に影響するのか、それがどのようなタイミングや順序で現れるのかについては、未だ解明されていない部分も多い。

本稿では、英語をL2とする日本語母語話者が英語の受動文を習得する際に見られる誤り（例：**I was cried by my son*）を取り上げ、この種の誤りを引き起こす原因を特定するための実験を行った。その結果をもとに、本稿では学習者の誤り、とりわけ学習者母語に起因する誤りの性質として、以下の点を主張する。

(1) a. 表面上同じ誤りであっても、誤りを引き起こす原因は複数存在しうる。
　　b. 学習者の母語のどのような性質が影響するかは、発達段階をはじめとしたさまざまな要因によって異なりうる。

本稿の構成は以下のとおりである。§2では、日英語の受動文における類似点・相違点をまとめ、続く§3で、先行研究をもとに、現時点でこの誤りについて明らかになっている点を整理し、先行研究では論じられていない別の学習者母語の性質がこの誤りに関与している可能性を論じる。§4では、その可能性を検証した本稿での実験を報告し、その結果をもとに、§5ではこの種の誤りを引き起こす原因と、発達との関係について論じる。最後に、§6で本稿の結論として、第二言語習得研究一般への示唆を述べる。

2．日英語の受動文

人間言語の重要な特徴のひとつに、同じ出来事（命題内容）を、別の言語形式で表す「態（Voice）」がある（鷲尾・三原, 1997）。この代表格と呼べる言語形式が能動文と受動文の対であり、この対は英語(2)、日本語(3)のどちらにも存在する。

(2) a. She criticized him.　　b. He was criticized by her.
(3) a. 彼女は彼を批判した。　　b. 彼は彼女に批判された。

他方で、日本語には「間接受動文（Indirect Passive）」（Howard & Niyekawa-Howard, 1976）と呼ばれる(4)のような受動文がある。間接受動文は、(4b)のような自動詞（「泣

く」）を含んだ文が成り立つことからも明らかなように、対応する能動文が存在しない。一方、(5)が示すとおり、英語では日本語の間接受動文に相当する受動文は非文となる。

(4) a. 私は娘にパソコンを使われた。 (cf. *私は娘がパソコンを使った。)
b. 私は娘に泣かれた。 (cf. *私は娘が泣いた。)

(5) a. *I was used the laptop by my daughter.
b. *I was cried by my daughter.

この日英語の違いは、表 1 にまとめた、それぞれの言語の受動形態素(*-en/-ed* vs. *-rare*)がもつ統語性質の違いにより生じると考えられる（穂苅, 2016)。表 1 を踏まえて、まずは英語の受動文(2b)がどのように作られるかを見ていく。

表 1　日英語の受動形態素の性質の違い（穂苅, 2016, p. 67 に基づく）

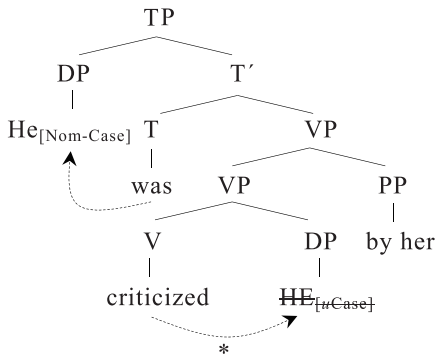
言　語		主格主語の降格[1]	外項付与	目的格の義務的吸収
英　語	(*-en/-ed*)	+	−	+
日本語	(*-rare*)	+	+	−

まず、英語の受動形態素がもつ性質の［+主格主語の降格］により、能動文で主格主語を担っていた動作主（Agent）は *by* を伴った付加詞に降格される。また、英語の受動形態素は、付加した先の動詞に本来備わっている目的格付与の能力を必ず吸収しなければならない（[+目的格の義務的吸収])。これにより、補部にある名詞句（対象：Theme）は動詞から格をもらえなくなる。このままでは文が破綻してしまうため、対象名詞句は主語位置へ移動し、時制辞 T から主格をもらい、(2b)のような受動文が作られる。この過程を議論と関係のない部分を大幅に簡略化して示すと、(6)のとおりになる（HE は格が決まる前の名詞句、破線は格付与の過程、*は格付与が行われないことを表す）[2]。

1　生成文法の枠組みにおいて、この性質は通常「動詞の外項を抑制し、付加詞へと降格させる」（Chomsky, 1981）と定義されるが、ここで「主格主語の降格」としたのは、後述する日本語の自動詞間接受動文では、付加詞への降格が起こっているとは限らないためである（長谷川, 2007； Hoshi, 1999 ほか)。

2　日本語受動文（3b）が英語と同様の方法で派生するのか（とりわけ名詞句移動の有無）については、生成文法の初期より膨大な研究と議論がなされており、さまざまな立場が存在する(Hoshi, 1999 参照)。そのため、このような日本語の「直接受動文：Direct Passive」（Howard & Niyekawa-Howard, 1976）がどのように派生するかは紙面の制約上、議論を割愛せざるをえないが、日本語の直接受動文がどのような派生を辿っていたとしても、本稿の結論には影響しない。

(6)



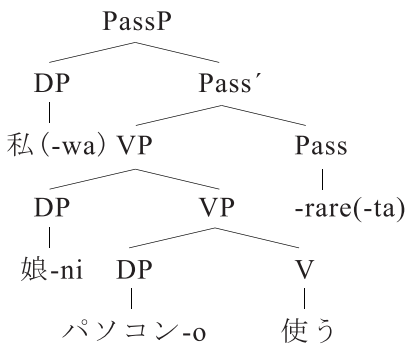
次に、日本語では(4)のような間接受動文がなぜ許されるのかについて見ていく(以下、7として再掲)。

(7) a. 私は娘にパソコンを使われた。 (cf. *私は娘がパソコンを使った。)

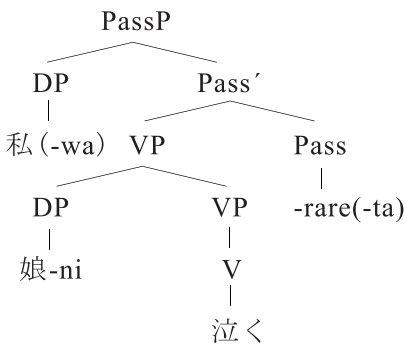
b. 私は娘に泣かれた。 (cf. *私は娘が泣いた。)

表1のとおり、日本語の受動形態素*-rare*も、[+主格主語の降格]の性質をもつため、本来主格主語を担うべき動作主(「娘」)がその地位を降格され、代わりに後置詞*-ni*を伴って現れる。しかし、日本語の受動形態素*-rare*は、(7a)において、動詞の目的語である名詞句「パソコン」が目的格*-o*を与えられていること、(7b)において、そもそも目的語をもたない自動詞にも付加できることから明らかなとおり、目的格付与能力の吸収は行われなくてよい([−目的格の義務的吸収])。さらに、本来動詞が認可できる項ではない経験主(Experiencer:「私」)が文の主語に現れていることから、受動形態素*-rare*は単なる接辞ではなく、独自の外項をもつことのできる述語である([+外項付与])。したがって、(7a)、(7b)はそれぞれ、(8a)、(8b)の構造をもつと考えられる(穂苅・木村, 2019)。

(8) a.



b.



これらを踏まえると、英語で間接受動文が許されない（例：5）のは、英語の受動形態素が（i）独自の外項をもてないこと、（ii）付加した先の動詞に備わっている目的格付与の能力を必ず吸収しなければならないことに起因する。

3．英語受動文習得における日本語間接受動文の影響

§2 での議論をもとに日本語母語話者が英語受動文を習得する過程を考えると、日本語の間接受動文に相当するような受動文（例：5）を使用・容認してしまう誤りが予測される。筆者たちが知る限り、この点を最初に調査した研究は Izumi and Lakshmanan（1998）であり、実際にそのような誤りが報告されているとともに、否定証拠を含んだ指導により、この誤りを減らすことができる点も論じられている（注 11 も参照）。本節では、この誤りの性質そのものに焦点を当てた 2 つの研究を概観し、現時点で明らかになっていることをまとめ、そのうえで、この誤りには別の原因も関与している可能性があることを論じる。

3.1　Inagaki et al.（2009）

Inagaki et al.（2009）は、日本語母語話者が日本語の間接受動文に相当する英語受動文を容認・使用してしまう誤りが、自動詞・他動詞の区別によりどう異なるか、この誤りは熟達度の伸長に応じてどのように変化するかの 2 点に着目し、中学 3 年生 24 名、高校 1・2 年生 32 名、大学生 40 名（中下級熟達度グループ 17 名、中上級熟達度グループ 23 名）を対象に、翻訳タスクと文法性判断タスクを実施した。ここでは、本研究と関係の深い文法性判断タスクのみを取り上げる。

Inagaki et al.（2009）の文法性判断タスクは、図 1 のように、日本語において間接受動文の使用が適切となるような状況を示した絵を提示し、その下にある 3 つの英文それぞれが、その状況を描写するのに適切な英文かどうかを判断させる内容であり、他動詞を用いた間接受動文では *eat*、*pull*、*read*、*take* の 4 つ、自動詞を用いた間接受動文では *cry*、*fall*、*sit* の 3 つを用いた文が用意された。動詞の種類・グループごとの間接受動文の容認率およびその推移は、図 2 のとおりであった（Inagaki et al., 2009, スライド 14 & 16）。

図 2 のとおり、自動詞、他動詞ともに、この種の誤りを容認する割合は英語の熟達度が上がるにつれて徐々に減少していくことが見て取れる。しかしながら、減少のタイミングには自動詞と他動詞で違いがあり、最も熟達度が低い段階では、動詞の種類にかかわらず、この誤りを容認するが、次第に自動詞で誤りを容認する割合が減り始め、次に他動詞の誤

図 1　実験文の例

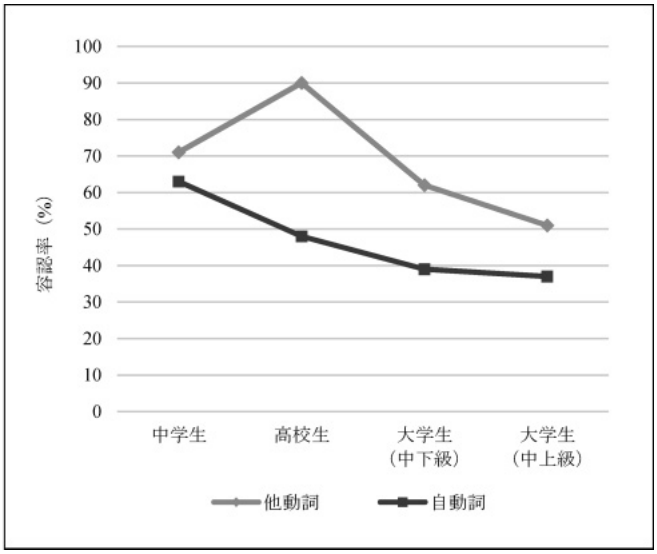


図 2　間接受動文の容認率の変化

りが減るという段階を辿っている。この結果から、Inagaki et al.(2009, スライド 20）は、間接受動文の容認・使用の誤りとその消失について、次の発達段階を提案している。

(9)　a. 動詞の種類にかかわらず、間接受動文を使用・容認する段階
　　b. 自動詞で間接受動文の使用・容認の割合が減少し始める段階
　　c. 他動詞で間接受動文の使用・容認の割合が減少し始める段階
　　d. 動詞の種類にかかわらず、間接受動文を使用・容認しない段階

3.2　穂苅（2016）

穂苅（2016）は、日本語の間接受動文に相当する英語受動文を容認してしまう誤りが本当に学習者の母語によるものかどうかを検証するため、日本語母語話者 32 名に加え、母語に間接受動文がないフランス語母語話者 21 名、および英語母語話者 20 名に容認性判断タスクを行った。実験では、図 3 のように文脈とこれに続く実験文が英語で提示され、参加者は実験文がどの程度英語として容認可能かどうかについて 5 段階の選択肢から判断するよう求められた。また、−2（*Unacceptable*）、−1（*Maybe unacceptable*）を選んだ場合には、参加者は容認できないと思う部分を正しい英語に訂正するよう指示された。穂苅(2016)の実験文では、*criticize*、*hit*、*kick*、*push* の 4 つの他動詞と *cry*、*dance*、*sleep*、*work* の 4 つの自動詞（非能格動詞）が使用され、それぞれについて、図 3 のような間接受動文が用

意された。

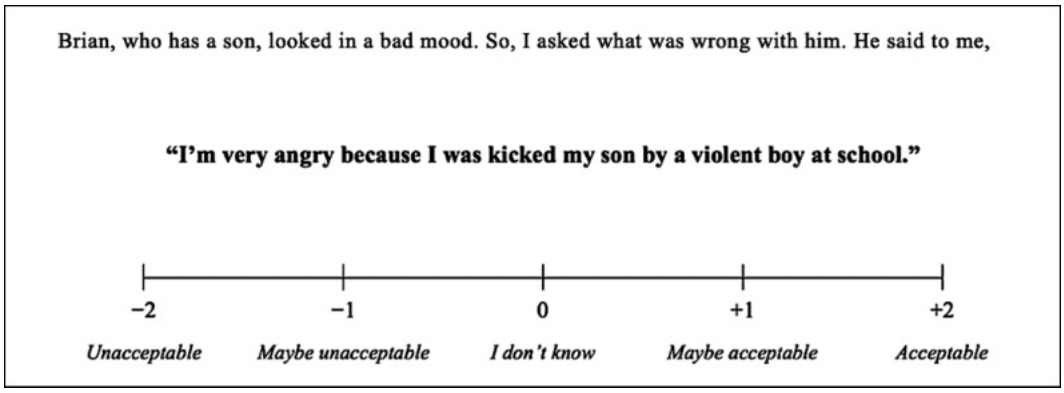


図 3　実験文の例（穂苅, 2016, p. 81）

各グループの間接受動文の容認率は表 2 にまとめたとおりで、英語母語話者およびフランス語母語話者は動詞の種類にかかわらず、ほぼ例外なく間接受動文を容認しなかった。一方で、日本語母語話者も他動詞を含む受動文は容認しなかったが、自動詞を伴う受動文については、容認率自体は高くないが、明らかにほかのグループよりも容認する割合が高かった[3]。

表 2　間接受動文の容認率（穂苅, 2016, p. 84 および p. 86 に基づく）

間接受動文	英語母語話者（n ＝ 20）	フランス語母語話者（n ＝ 21）	日本語母語話者（n ＝ 32）
他動詞（例：*hit*）	0%	5%	6%
自動詞（例：*cry*）	5%	5%	27%

穂苅（2016）は、より詳細な結果として、自動詞と他動詞それぞれについて、一度でも間接受動文を容認したかどうかという基準で、参加者ひとりひとりの間接受動文の容認パターンも分析している。日本語母語話者の結果は表 3 に示したとおりであった。

3　Inagaki et al.（2009）と比べ、穂苅（2016）では間接受動文の容認率が低い。穂苅（2016）はこの点について、(a) 参加者の熟達度の違い、(b) 使用された動詞の違い、とりわけ、非対格動詞・非能格動詞の両方を含む実験（Inagaki et al., 2009）と非能格動詞のみの実験（穂苅, 2016）という違いを挙げている。

表 3　日本語母語話者（n ＝ 32）の容認パターン（穂苅, 2016, p. 88 に基づく）

自他ともに容認		自動詞のみ容認		他動詞のみ容認		自他ともに否認	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	3%	11	34%	3	9%	17	53%

表 3 のとおり、ほとんどの参加者は、間接受動文そのものを容認しない学習者であったが、残りの参加者を見ると、間接受動文を容認する場合、ほとんどの参加者は自動詞のみで間接受動文を容認した学習者であった。この結果から、穂苅（2016）は、Inagaki et al.（2009）で提唱されている発達段階(9)に「他動詞では間接受動文を容認せず、自動詞のみで間接受動文を容認する」という段階（段階 X）を加えた図 4 の発達段階を論じている。

段階 1：自動詞、他動詞で間接受動文を同程度容認・産出する。

段階 2：自動詞のみ間接受動文を徐々に容認・産出しなくなる。

段階 3：他動詞でも間接受動文を徐々に容認・産出しなくなる。

段階 X：他動詞のみ間接受動文をまったく容認・産出しなくなる。

段階 4：自動詞、他動詞ともに間接受動文を容認・産出しなくなる。

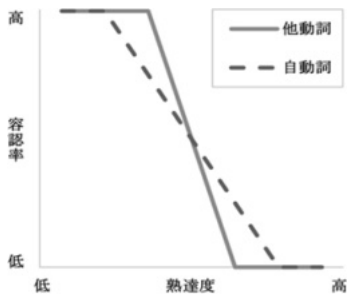


図 4　予測される誤りの出現・消失の順序（穂苅, 2016, p. 97 に基づく）

また、穂苅（2016）は、この誤りの原因、とりわけ、自動詞のみでこの誤りが続く段階について、§2 で触れた受動形態素の性質から(10)の主張を行っている。

(10)　a.　日本語母語話者は、日本語の受動形態素の性質［+外項付与］を英語の受動形態素に転移している。

b.　自動詞のみで間接受動文を容認する日本語母語話者は、受動形態素による目的格の吸収について、目標言語と母語の中間に位置する規則（吸収する目的格がある場合には、これを義務的に吸収する）を形成している。

(10a)は、動詞の種類にかかわらず、本来動詞が認可できない項が主語として現れる間接受動文を成り立たせる必要条件であるため、日本語母語話者が間接受動文に相当する英語受動文を容認したということは、この性質を英語の受動形態素に転移させていると考え

られる。一方、(10b)は、自動詞のみで間接受動文を容認するという目標言語とも母語とも異なる学習者の振る舞いを説明するものであり、この段階にある学習者は、吸収する目的格がある場合（つまり、他動詞の場合）には目的格の吸収を行うが、吸収する目的格がない場合（つまり、自動詞の場合）には、それを吸収しなくてもよいという学習者独自の規則が形成されていると主張している[4]。

3.3　誤りの原因に対する別の可能性

ここまで、この種の誤りについて先行研究で明らかになっている特徴、および先行研究での論点を明らかにしてきた。それらをまとめると(11)のとおりになる。

(11)　a.　日本語母語話者は日本語の間接受動文に相当する英語受動文を容認・使用する。
　　b.　母語に間接受動文がない場合、この種の誤りは出てこない。
　　c.　この誤りの出現・消失には自動詞と他動詞で差が見られる。

これらを総合すると、この誤りの原因には学習者の母語、すなわち日本語の間接受動文からの影響が関わっていると考えてよいだろう。しかしながら、この種の誤りにはまったく別の学習者母語の性質が関係している可能性もある。なぜなら、日本語には(12b)のような間接受動文のほかに、(12c)のような「使役受動文（Causative Passive）」が存在するからである。

(12)　a.　*I was cried by my son.
　　b.　私は息子に泣かれた。
　　c.　私は息子に泣かされた。

表面上、(12b)と(12c)は、使役形態素（*-(s)ase-*）が、動詞の語幹（*nak-*）と受動形態素（*-(r)are-*）に介在しているかどうかの違いに見えるが、両者は「誰が何をした」という命題レベルにおいて、まったく異なる出来事を描写している。(12b)では、「私」は「息

4　§2で論じたとおり、英語では受動形態素側の要請で目的格の吸収が義務的に行われなければならないため、そもそも目的格付与の能力をもたない動詞ではこの性質が満たせない点にご注目いただきたい。

子が泣く」という出来事から何らかの影響を受けた経験主であり、「泣く」という行為の動作主は「息子」である。一方、(12c)における「泣く」の動作主は「私」であり、これを引き起こした人物（Causer：使役主）が「息子」である。

この点から考えると、日本語母語話者が(12a)のような英語受動文を使用・容認してしまう原因は、日本語の間接受動文のみにあるとは言い切れないが、これまでの研究では、この点について十分な検証がなされてない[5]。本研究では、(12a)のような英語受動文を容認してしまう原因が、間接受動文、使役受動文のどちらにあるのか、あるいは両方が関係しているのかを実証的に明らかにする。

4．実験

4.1　参加者

日本語を母語とする英語学習者 36 名を対象に実験を行った。実験前に、参加者には英語の熟達度を測定するためのクローズテスト（計 21 問）に回答してもらった[6]。その結果をもとに、クローズテストの得点がほかの参加者より極端に低い参加者（1–2 点）、指示に従って回答をしていない参加者計 5 名を分析対象から外し、残りの 31 名の回答を分析対象とした。表 4 は、クローズテストの結果に基づいた参加者のグループ分けの詳細である[7]。

表 4　参加者の詳細

グループ		*n*	クローズテスト（Max. ＝ 21）		
			M	*SD*	*Range*
初級	（得点：10 点未満）	15	7.2	1.4	5–9
中級	（得点：10 点以上）	16	11.9	1.3	10–14

5　Inagaki et al.(2009）では状況を示すために絵を添付しているため、使役受動文の解釈が排除されていた可能性が高いが、間接受動文・使役受動文のどちらとも解釈の余地がある文脈を提示している穂苅（2016）では、使役受動文の影響が現れていた可能性がある。

6　クローズテストは、市販の教材から高校入試レベル（大岩・安河内, 2012）と高校英語初級レベル（野村, 2014）のパッセージを選び、パッセージの冒頭のパラグラフを抜粋して作成した。抜粋したパラグラフそれぞれについて、最初の文を背景情報として空所を設けずに残し、以降の文について、一定語数ごとに空所を作った。なお、採点には「テスト作成に使用した原文と同一の語のみを正解とする」（白畑ほか, 2019, p. 43）方法を採用した。全体の平均点が低めになっているのはこの採点方法による部分もある。

7　本実験では、英語母語話者に対するデータ収集は行っていないが、先行研究（例：穂苅, 2016）の結果から判断する限り、英語母語話者が本実験で提示した受動文を容認するとは考えにくい。

4.2　手順と材料

Google Forms を使用し、容認性判断タスクを行った（図 5 参照）。まず、参加者に誤った英語受動文を提示し、その文が英語として正しい文かどうかを、5 つの選択肢から判断してもらった（手順 1）。提示された文を「わからない（判断できない）」「おそらく誤りである」または「誤りである」と判断した場合には、次の問題に進むようフォームを設定した（手順 3）。一方、提示された文を「正しい」または「おそらく正しい」と判断した場合には、その文で描写されている状況において、動作の担い手（動作主）は誰かを問う追加問題（手順 2）を提示した。選択肢は、主語に現れている人物（A）の動作か、*by* の直後に現れている人物（B）の動作かの 2 択であり、A を選んだ場合には、学習者は提示された英語受動文について日本語の「使役受動文」に相当する解釈をしていることになり、B を選んだ場合には、その文を日本語の「間接受動文」に相当するものと解釈していることになる（§3.3 参照）。

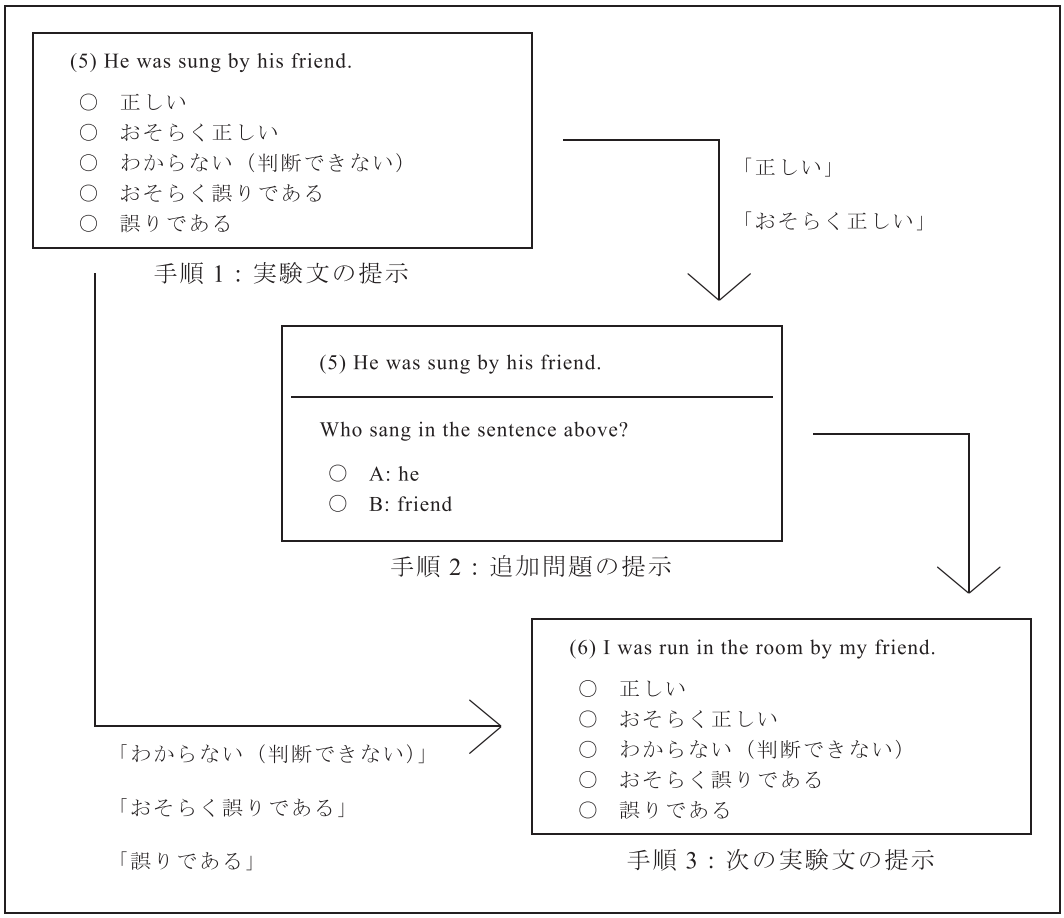


図 5　実験の手順

用意した実験文は表5の4種であり、他動詞（タイプ1）、自動詞（タイプ2）それぞれについて、主語と *by* 句以下で描かれている人物の関係性に上下関係をもたせた実験文（タイプA）とそうでない実験文（タイプB）の2種類を用意した。登場人物の関係性が異なる2つを用意したのは、とりわけ使役受動文の解釈のしやすさに、登場人物の関係性の違いが影響を及ぼす可能性があったためである。つまり、現実世界と照らし合わせた場合、使役受動文が用いられる文脈は、使役主（Causer）の立場が、動作主（Agent）よりも上の場合であることが多いと考えられるからである。

表5　実験文のタイプ

タイプ	動　詞	上下関係	例	トークン
1 A	他動詞	+	*He was carried the luggage by his father.	4
1 B	他動詞	−	*I was carried the luggage by my friend.	4
2 A	自動詞	+	*She was cried by her mother.	4
2 B	自動詞	−	*I was cried by my friend.	4

表6　実験に使用した動詞

動詞		間接受動 [V-(r)are-ru]		使役受動 [V-(s)as(e)-(r)are-ru]	
他動詞	carry	運ばれる	hakob-are-ru	運ばされる	hakob-as-are-ru
	change	変えられる	kaer-are-ru	変えさせられる	kaes-ase-rare-ru[8]
	eat	食べられる	taber-are-ru	食べさせられる	tabe-sase-rare-ru
	take	撮られる	tor-are-ru	撮らされる	tor-as-are-ru
自動詞	cry	泣かれる	nak-are-ru	泣かされる	nak-as-are-ru
	run	走られる	hasir-are-ru	走らされる	hasir-as-are-ru
	sing	歌われる	utaw-are-ru	歌わされる	utaw-as-are-ru
	work	働かれる	hatarak-are-ru	働かされる	hatarak-as-are-ru

実験文には、表6にある他動詞4つと自動詞4つを使用した。使用した動詞はいずれも対応する日本語の動詞が間接受動文、使役受動文になりうるものであり、自動詞に関して

8　秋本隆之氏（p.c.：2021年10月23日）にご指摘いただいたとおり、実験で使用した動詞の中には、対応する日本語が「語彙的使役」による自他交替を許す動詞が混じっていた。このような性質を併せもつ動詞とそうでない動詞で、使役受動文の解釈のしやすさに違いが生じる可能性もあるが、これに該当するものは *change*（変わる–変える）のみであったため、ほかの動詞と区別はしなかった。

は、穂苅（2016）や穂苅・木村（2019）に倣い、非能格動詞のみを使用した。

これらの手順で作成した実験文計 16 文を、順番をランダムに並べ替え、Google Forms を使って参加者に提示した[9]。なお、本実験では錯乱文は用意せず、実験を行った。

4.3　結果

まず、非文法的な英語受動文を日本語母語話者がどの程度容認していたかを見ていく。その結果は、表 7 にまとめたとおりである。

表 7　非文法的な英語受動文の容認数・容認率（グループ・タイプ別）

動詞	タイプ	上下関係	初級（n ＝ 15）		中級（n ＝ 16）		全体（n ＝ 31）	
			容認数	容認率	容認数	容認率	容認数	容認率
他動詞	1 A	+	29	48%	28	44%	57	46%
	1 B	−	30	50%	27	42%	57	46%
	計		59	49%	55	43%	114	46%
自動詞	2 A	+	22	37%	21	33%	43	35%
	2 B	−	26	43%	27	42%	53	43%
	計		48	40%	48	38%	96	39%

グループ間で容認率を比較すると、どの文タイプにおいても、初級グループよりも中級グループでこの誤りの割合が減少していることが読み取れる。しかし、その差はいずれも 10% 以下とそれほど大きな差ではなく、あくまで減少傾向である。一方、他動詞と自動詞の結果をグループ内で比べると、容認率が同率であった中級の［−上下関係］の文タイプ（1B vs. 2B）を除き、他動詞の方が、自動詞よりも高い割合で誤りが容認されている。したがって、どちらのグループの学習者も、両方の動詞でこの誤りを容認するが、自動詞でその容認が減り始めている段階（図 4 で言うところの段階 2）にいると推測される。

次に、表 7 にまとめた誤った受動文を容認した回答について、その受動文をどのように解釈しているか（日本語の間接受動文に相当する解釈か、使役受動文に相当する解釈か）を調査した追加質問の結果を見ていく。図 6 は、他動詞を含む受動文の結果である。

9　本実験は別の調査目的をもった実験と同時に行ったが、そちらの実験は本稿の主旨とは関係がないため、議論は省略する。

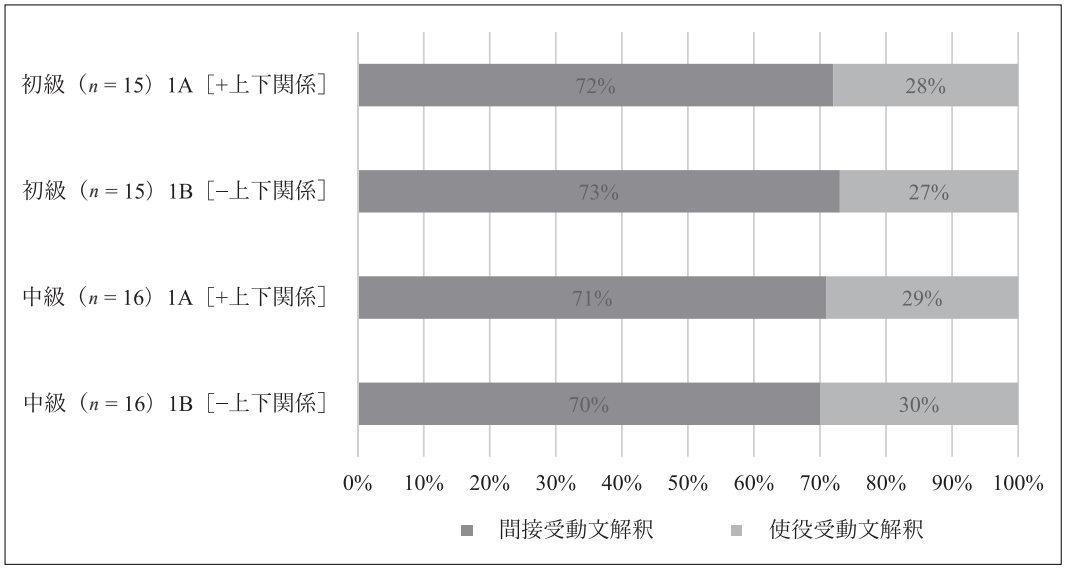


図 6　非文法的な他動詞英語受動文に対する解釈

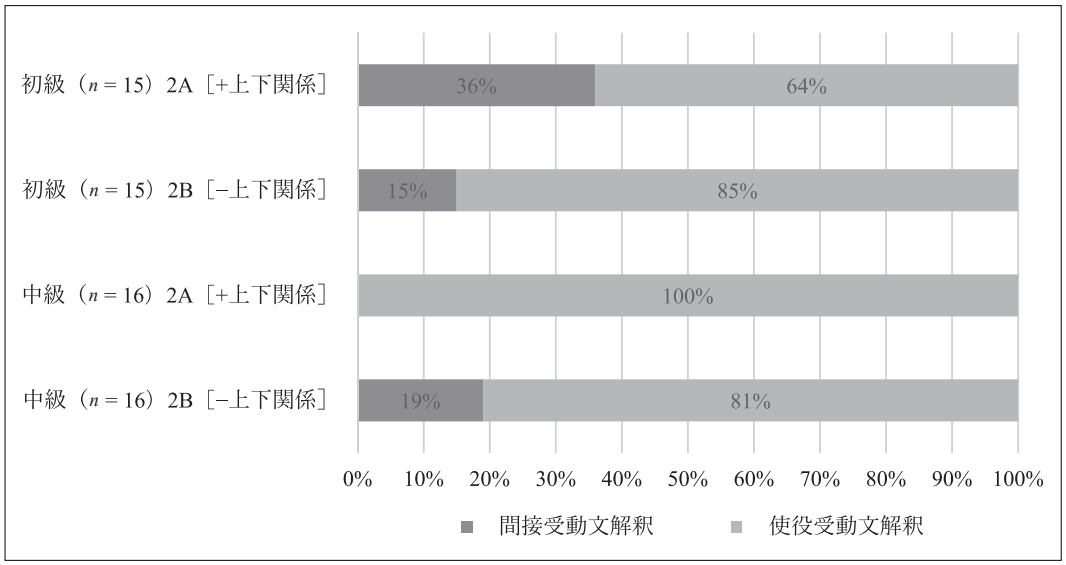


図 7　非文法的な自動詞英語受動文に対する解釈

図 6 から見て取れるとおり、熟達度、主語と *by* 句に現れている人物の関係性（[±上下関係]）の違いにかかわらず、7 割の回答で間接受動文に相当する解釈（つまり、*by* 句に続く人物を動作主とした解釈）が選ばれていた。つまり、他動詞においては一部使役受動文に相当する解釈も見られるものの、ほとんどの場合、参加者は日本語の間接受動文に相当する文として誤った受動文を容認していたことがわかる。

しかしながら、図 7 に示したとおり、自動詞を含む受動文においてはまったく逆の結果

が現れた。初級の［+上下関係］の受動文（タイプ 2A）では間接受動文に相当する解釈が 36% 選ばれていたが、そのほかについては、使役受動文に相当する解釈（つまり、文の主語を動作主とする解釈）が圧倒的な割合で選ばれており、間接受動文に相当する解釈はほぼ選ばれていなかった。つまり、自動詞においては、日本語の使役受動文に相当する解釈として、誤った受動文を容認していたことが読み取れる。

5．議論：二種類の母語の影響と発達段階

ここまで、本研究で行った実験の詳細とその結果を見てきた。本実験から得られた主な発見・結果は(13)にまとめたとおりである。

(13)　本実験の主な発見・結果

a. 日本語母語話者が、**I was carried the luggage by my friend* や**I was cried by my friend* のような英語受動文を容認してしまう原因には、日本語の間接受動文の影響だけでなく、使役受動文の影響もある。

b. 本実験の参加者の中間言語文法では、他動詞を含む受動文（例：**I was carried the luggage by my friend*）を容認する原因は、日本語の間接受動文からの影響である場合がほとんどであった。

c. 本実験の参加者の中間言語文法では、自動詞を含む受動文（例：**I was cried by my friend*）を容認する原因は、日本語の使役受動文によるものであった。

(13a)の結果は、§3.3 での予測を裏付ける結果であり、この誤りは必ずしも日本語の間接受動文の影響だけで引き起こされるわけではないことが確認された。加えて、(13b, c)の結果は、間接受動文、使役受動文のどちらが学習者の中間言語文法に影響するかは、動詞の種類によっても異なることを意味しており、この誤りが先行研究で論じられている以上に複雑な要因によって生じることを示している。本節では、これらの結果をもとに、先行研究での結果や主張を再解釈していく。

§3 で論じたとおり、先行研究（穂苅, 2016; Inagaki et al., 2009）では、学習者の熟達度と動詞の種類の違いで、この誤りの出現にどのような違いが見られるかがひとつの論点となっている。Inagaki et al.(2009) は、L2 習得の初期段階では自他の区別で誤りの出現に差は見られないが、熟達度が上がるにつれて自動詞から誤りが減り始め、その後、他動詞

でも誤りが減り始めるという変化を報告している（§3.1 参照）。一方、穂苅（2016）は、より熟達度が高い学習者において他動詞での誤りが完全に消失した後でも、自動詞では引き続き誤りが観察されることを報告し、Inagaki et al.（2009）の結果と合わせて、図 4 の発達段階を予測している（§3.2 参照）。これらの報告に本研究で明らかになったことを付け加えると、この誤りの変化に関するより詳細な説明や予測として、表 8 にまとめた内容が浮かび上がる。

表 8　誤りの出現・消失の推移と母語の影響（に関する予測）

段階		母語の影響	
		間接受動	使役受動
1	自動詞、他動詞で誤った受動文を同程度容認・産出する。	あり	?
2	自動詞のみ誤った受動文を徐々に容認・産出しなくなる。	あり	あり
3	他動詞でも誤った受動文を徐々に容認・産出しなくなる。	減少？	あり
4	他動詞のみ誤った受動文をまったく容認・産出しなくなる。	なし	あり
5	自動詞、他動詞ともに誤った受動文を容認・産出しなくなる。	なし	なし

本研究で実験を行った日本語母語話者は、初級グループ・中級グループともに、自動詞の方がこの誤りの容認率がやや低いものの、他動詞でもこの誤りを容認していた点を考えると、本実験の参加者は表 8 で示した段階 2 にいると考えられる。そして、（13 b, c）の結果のとおり、他動詞では間接受動文の影響、自動詞では使役受動文の影響が見られたことから、この段階の学習者は、間接受動文と使役受動文の影響が共存する段階にあると考えられる。この段階を起点として前後の段階における変化を引き起こす原因を予測すると、おそらく、他動詞でも徐々にこの誤りが減少していくこと（段階 3）は、間接受動文の影響が徐々に消失していくことを意味し、他方で、他動詞でこの誤りが消失したあとでも、自動詞では依然として誤りが残る点（段階 4）は、間接受動文の影響が消失したあとも、使役受動文の影響がしばらく残ることを意味しているのだろう[10]。使役受動文の影響がどの段階から出現するのか（段階 1 でも使役受動文による影響が見られるのか）は、本研究の結果からは定かではないが、先行研究で報告されている誤りの出現・消失に関する変化は、間接受動文の影響、使役受動文の影響という二種類の母語の影響と、その影響の出現・

10　段階 2 で、他動詞では間接受動文に相当する解釈が優勢であったこと、自動詞では間接受動文としての解釈がほぼなかった点にご注目いただきたい。

消失のタイミングの違いという点から捉え直すことができるだろう。

ここで生じる新たな疑問は、なぜ間接受動文の影響から使役受動文の影響へと推移していくような発達を辿るのかという点である。考えられる可能性は、日本語母語話者は間接受動文が英語では許されないことには比較的早い段階で気づくことができるが、依然として、日本語の間接受動文に類似する英語受動文が非文法文であるとは断定できず、その時点で学習者の文法（母語、L2 両方を含む）の中で利用可能なほかの文法構造と結びつけ、なんとか非文法的な受動文を解釈しようとした結果、間接受動文から使役受動文へという推移が生じるという可能性である[11]。ここで注目したいのは、(14a)のような使役受動文は、(14b)のような対応する能動文をもつ「直接受動文」(Howard & Niyekawa-Howard, 1976)だという点であり、同様の使役受動文(15a)は、(15b)のように対応する能動文をもつため、英語でも文法的である。

(14)　a.　私は友人に泣かされた。　　b.　友人は私を泣かせた。

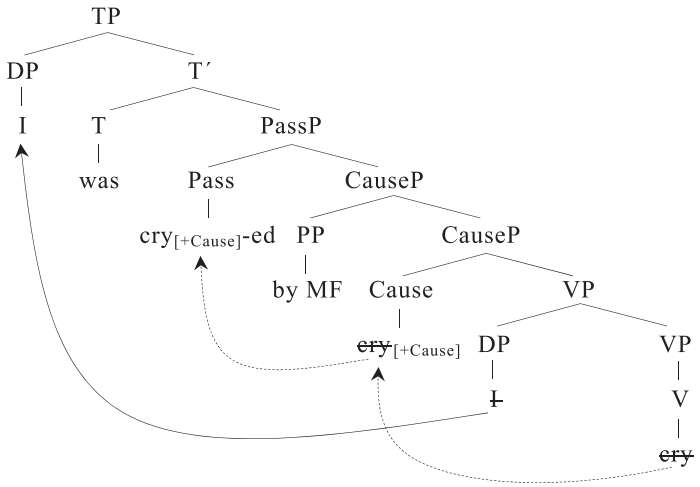
(15)　a.　I was made to cry by my friend.　　b.　My friend made me cry.

つまり、間接受動文が許されないことにある程度早い段階で気づけたとしても、対応する能動文をもつ直接受動文は英語でも文法的であることから、使役受動文（直接受動文）の構造を転用しつつ、なんとか非文法的な受動文を解析しようと試みた結果、間接受動文から使役受動文の影響へという推移が見られたのではないかという可能性である[12]。もしこの推測が正しいとすれば、その際に日本語母語話者の中間言語で構築されている文構造は、大雑把に考えると、(16)に類するものになるだろう。(16)において、実線は名詞句移動、破線は主要部移動の軌跡を表し、[+Cause] は、本来使役動詞 *make* として書き出し（Spell-out）を受けるはずであった使役に関する素性のみが派生に導入され、主要部移動によって動詞 *cry* に付加されることを示す。

11　間接受動文の影響を比較的早い段階で克服できるのは、「対応する能動文の目的語が主語になるものが英語の受動文である」といった教科書の説明や教室での指導も影響しているだろう。実際、英語では間接受動文が許されないことを明示的に指導することで、この誤りは減少するという研究結果もある（坂内, 2010； Izumi & Lakshmanan, 1998）。

12　この可能性は大滝宏一氏（p.c.：2021 年 10 月 23 日）のご指摘から考えたものである。記して感謝を申し上げたい。

(16)　*I was cried（≒ made to cry）by my friend.



このような構造がどの程度日本語母語話者の中間言語文法を捉えているのか、とりわけ、なぜ使役を司る部分が使役動詞として書き出されないのかは、今後の課題としたい[13]。

6．結論と第二言語習得研究一般への示唆

本稿では、先行研究（穂苅, 2016; Inagaki et al., 2009; Izumi & Lakshmanan, 1998 ほか）で報告されている、日本語の間接受動文を転移させたように見える英語受動文の誤りが、間接受動文による影響だけでなく、使役受動文の影響も受けていることを実証的に明らかにしてきた。この結果は、受動文だけでなく、第二言語習得研究一般に対しても一定の示唆がある。それは、本稿の冒頭で述べた(1)の点である（以下、17 として再掲）。

(17)　a. 表面上同じ誤りであっても、誤りを引き起こす原因は複数存在しうる。

　　b. 学習者の母語のどのような性質が影響するかは、発達段階をはじめとしたさまざまな要因によって異なりうる。

13　この点と関連して興味深いのは、自動詞では間接受動文が作れない韓国語を母語とする学習者が英語を習得する際にも、日本語母語話者と同じように、自動詞のみでこの誤りが継続する段階（表 8 で言うところの段階 4）が存在する点である（穂苅・木村, 2019）。韓国語では、日本語の「泣かされた（*nak-as-are-ta*）」にあたる「使役–受動」という接辞の並びは非文法的であり（**wul-li-hi-* ‘to-be-caused-to-cry’: Yeon, 1991, p. 343）、加えて、受動形態素と使役形態素の境界がときに曖昧になる場合もある（Aoyagi, 2021; Yeon, 1991 ほか）。したがって、使役受動文の影響が果たして韓国語母語話者にも同様に生じているのかも含めて、今後さらなる検証作業が必要となる。

本稿で扱った受動文に関する研究も含め、表面上観察できるレベルにおいて同種の誤りであれば、その原因は一定のものであると仮定してしまいがちだが、本研究の結果からも示唆されるとおり、表面上同じ誤りが、常に一定の理由で生じているとは限らない（若林ほか, 2018）。加えて、表面上現れている誤りの原因は、学習者の発達段階や文の中に含まれる要素といったさまざまな変数に影響を受け、変化する可能性がある。これらの点は、L2 習得という営みの複雑さを物語るとともに、それを紐解くための方法を工夫していくことの重要性を示している。

参考文献

Aoyagi, H.（2021）. On the causative and passive morphology in Japanese and Korean. *Open Linguistics*, *7*, 87–110.

坂内昌徳.（2010）.「明示的文法指導の効果に関する研究―間接受動文の非文法性―」『研究紀要』第 51 号, 127–133.

Chomsky, N.（1981）. *Lectures on Government and Binding : The Pisa Lectures*. Foris.

Corder, S. P.（1967）. The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, *5*, 161–170.

長谷川信子.（2007）.「日本語の受動文と little *v* の素性」『Scientific Approaches to Language』第 6 号, 13–38.

穂苅友洋.（2016）.「日本語母語話者の中間言語における英語受動形態素の統語性質―日本語間接受動文の影響から―」『人文研紀要』第 83 号, 61–107.

穂苅友洋.（2021）.「誤り研究への招待」河西良治教授退職記念論文集刊行会（編）『言語研究の扉を開く』（pp. 103–117）. 開拓社.

穂苅友洋・木村崇是.（2019）.「英語受動文習得における学習者母語の役割―日本語話者と韓国語話者に対する実験から―」『人文研紀要』第 92 号, 27–59.

Hoshi, H.（1999）. Passives. In N. Tsujimura（Ed.）, *The Handbook of Japanese Linguistics*（pp. 191–235）. Blackwell.

Howard, I., & Niyekawa-Howard, A. M.（1976）. Passivization. In M. Shibatani（Ed.）, *Syntax and Semantics Volume 5 : Japanese Generative Grammar*（pp. 201–237）. Academic Press.

Inagaki, S., Katsurahara, M., Yamashita, G., Kusrini, D., & Dohi, M.（2009）. *Why Can't You "Be Eaten Your Cake"? : Overgeneralization of the Passive by Japanese EFL Learners at Different Proficiency Lev-*

els. Paper presented at the 9th Annual Conference of the Japan Second Language Association (J-SLA 2009). Chuo University, Tokyo, Japan.

Izumi, S., & Lakshmanan, U. (1998). Learnability, negative evidence and the L2 acquisition of the English passive. *Second Language Research, 14*, 62–101.

野村武士. (2014).『英語長文を読むためのパラグラフ・リーディング（高校初級用)』日栄社.

大岩秀樹・安河内哲也. (2012).『ハイパー英語教室中学英語長文 2：入試長文がすらすら読める編』桐原書店.

白畑知彦・冨田祐一・村野井仁・若林茂則. (2019).『英語教育用語辞典（第 3 版)』大修館.

竹田実夢. (2021).「日本語話者の英語受動文の誤りから考える学習者母語の役割―間接受動文の誤りとその解釈について―」卒業論文, 跡見学園女子大学.

Towell, R., & Hawkins, R. (1994). *Approaches to Second Language Acquisition*. Multilingual Matters.

若林茂則・穂苅友洋・秋本隆之・木村崇是. (2018).「論考：分散形態論が照らし出す三人称単数現在-*s*の変異性の多層的原因」『Second Language』第 17 号, 51–84.

鷲尾龍一・三原健一. (1997).『ヴォイスとアスペクト』研究社.

Yeon, J.-H. (1991). The Korean causative-passive correlation revisited. *Language Research, 27*, 337–358.